

90

90

御鉢
言名木

宮本左門之助武勇傳

と名めたる人のすむぶやうでん



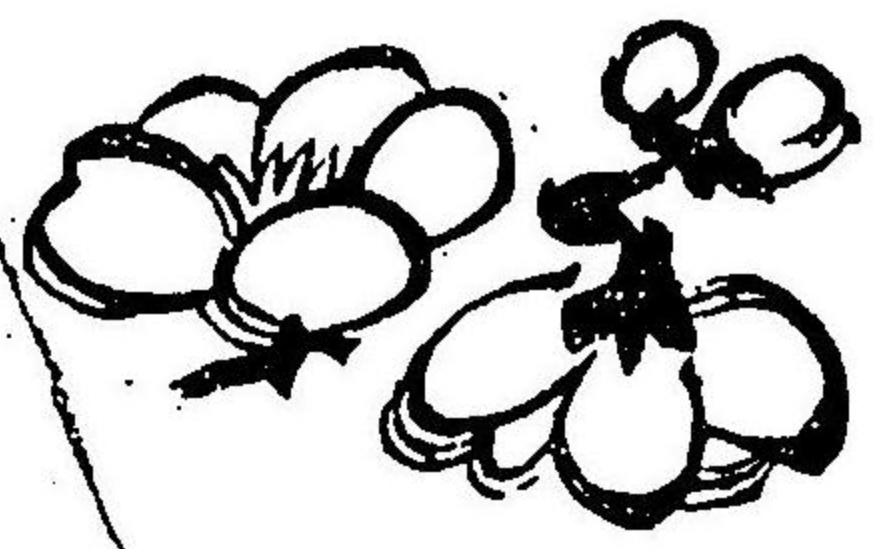
金梅鉢
名木



左門之助

武勇傳

金松堂梓



金梅鉢 宮本左門之助武勇傳下

第十回

岡田霞船 著

借も宮本左門之助は姫路藩主の愛させ給ひ且又老臣黒島が厚意を以て仕官の儀も屢勤めたる逆も身に大望を懐きし故暇を請ふて姫路を立退其年七月中旬頃江都表に着けるが諸侯の城下と事替り三都の中の大都會見る者をして眼を驚かし其繁昌盛へん方無く夫より榊原家の上邸に到り敵鈴木を索しに豈圖らんや源藏の在勤中に不埒の事あり已に糾問せらる可きを渠も悪事の露現を悟り先に逐電致せりと詳細知れて宮本は一個落膽傲したれ共是非無く旅宿より光陰を送り其年を越し慶安四年正月と相成左門之助廿三才となれり當時暖氣打續き梅花の盛りと聞及び龜戸村の天神へ參詣せばやと宮本の旅宿を疾く立出しが又此村に鎮座せる天満宮は筑紫太宰府に有る飛梅を以て神像を造り當社至寶と稱するの菅公の佩せられたる天國の寶劍なるが當時勸請の地と云ふの今の宮居より東南の方として耕田の中に有りし者なり今に元宮と稱して祠あり其後寛文三年に至り當今の地に宮居を營み心字の池樓

門等總て社頭の景色宰府の佛を摸せり同く十一年後水尾帝震翰を瀧ぎ菅神の尊號を賜ふ
 又元祿十一年一社の神事法式等宰府本宮の例も准す可き旨同帝の勅許を蒙りし者なり這の
 贅言に似たれ共因に依つて茲に録す却説宮本の神殿に跪き一心を凝して祈禱を込順て社内
 を立出し最早正午共覺ゆるに途ある片邊の割烹店に到り中食を爲て居たりしが隣座敷の
 客と云ふ侍二人を供に連親子と見ゆる女客其内處女と覺敷の年齢二八の春を又迎へし計
 りの美女にて皆中食の折柄に何れの藩士か知らね共七八人の打連立又も此家に入來しが奥
 の一室に座を設け不行跡なる酒宴を做し打興じて居たりし中より一個が夫へ立上り奥の
 一室を指しつ男計りの酒宴で一向面白からぬより僥倖彼處の御婦人連なり率某しが御無
 心申娘を借て參らんと最無遠慮にも入來り我等の御覽せられし如く男連にて興も無し須臾
 の間お娘子を酌の敵手よお貸あれ此儀をお願申さん爲め推參致せし者なりと聞て驚く處女
 の母親聊か席を進み出如何なる事と存じの外思ひ寄らざる其お詞姿の人並在すれど世間知
 らずれ處女育ちお酌を致す事さへ知らぬ不肖者よ御座り升れば此儀のお免下されと否むを

聞より武士は喃かと計り着座込其御配慮には及ばぬ事お育ち柄も最前より篤と偵ひ罷り在
 假令お酌はせられず共我等が酒宴の席へさへ鳥渡臨まれ給ひし上の直様お返し申なり何も
 左程よ親御にの心配爲る事よ及ばず御迷惑か存せね共暫時の間是非共に拜借致さん其爲
 に推參爲したる者なれば今お斷りを受けを迎おめく席へ返られず餘り無遠慮の様なれ共
 聞入給のぬ上からのぬ連申て參らんと近附よりて手を捕へ立上るにぞ母親も供人諸共押隔
 宥め賺せど聞ばころ又も二人の武士が現れ出て某しも拜借致す連中なれば力を添んと馳入
 る体よ最前よりして宮本の始終の様子を伺ひ居しに餘り無禮を盡せる耳か娘親子の難澁を
 見兼て夫へ進み出諸君の何れの御藩か知らねど斯く迄否む御婦人を是非にと望み召るゝの
 御酒の上との存すれ共道に外れた御所存なり且又強てお招き有るも別段お興に成る共覺へ
 す又横合から某しの申出るの失禮なるが斯く云ふ拙者に御免じ有りて彼の御婦人を召るゝ
 儀いお止り有て然る可く平に聞濟給のれと述るを聞より件んの武士は左門之助を取圍み己
 れは何國の者なるか未だ青二才の分として留立爲すこそ片腹痛し此奴を先へ息の根留よと

舞き立ば其餘の者も瘦浪人から討取と一度に咄と立掛り理非を辨せぬ無法の舉動早是非なしと宮本の前に進みし一人の利腕擔ひで投出し又も右手より掴み掛るを早速の當身に打倒せむ残りの族の一同に刀の鞘を拂ふと見へしが前後左右の差別なく斬込來るを者共せず白刃の下を甲斐潜り手玉の如く投除る其勁捷は怖れしや七八人の若侍の始めの勢ひ何處へやら逃るもあれを説るも有りて忽ち其場の鎖りけるは左門之助の形を改め残りし武士に打向ひ尙は將來を警戒て其儘放ち免しける此時娘親子の者も蘇生たる心地して二個諸共進を出兩手を着頭を下良人の氏名且又其身の名をも打明し實に今日天満宮へ參詣し其歸り路に今の大難危ふき處をお救ひ下され何とお禮の申左右やう無く何れ邸宅へ歸りし上良人又委細申聞早速再生の御恩をば必ず報ひ奉らん何卒何れの御藩士なるや御姓名をば伺ひ度と述るを聞て宮本の莞爾と計り打笑遣り又存外のお詞なり某し一時御難儀をお救ひ申上れば逆争かお禮を受可きや且小生も浪士の身の上居所も定めぬ者なればお心遣ひ決して御無用其お言を戴く上は此身に餘るお志し斯く云ふ内に若し今の無法者らが來も致さば又御難儀の

有るやも知れず我等も少しもお構ひ無くお歸りあれと言ながら其身も料理の價ひを濟せ早立出ん体なれば娘と共に進み寄り追ての御姓名を伺ひ度左も無き時の歸宅の上良人へ語し相成難し何卒仰せ聞られ度と只管請ふて是非も無く然らば杯か包み申さん石州津和野の浪士にて宮本左門之助と申者斯く姓名と申上れば最早御用も御座るまじ御縁の有を又此後御面會に及ぶべしお免しあれと言棄て其家を竟に立出けり又も續て親子の者思ひぬ時刻を移せしに料理の價茶代まで心を附て拂ひを濟せ表の方へ立出れば早宮本の陰さへ見へず此時母の處女も向ひ思ひも寄りぬ大難を遁れて無事歸れるも宮本殿の在さず心と女の勿論妾まで如何なる憂目を見る事か知れぬ火急の難儀をも救ひせられしお禮さへ緩々聞も入られず且又お年も若くして武勇の優れ給ひしに並々ならぬ御腕前御姓名こそ伺ひたれ共お宿所迄の明されず又今更の様なれ共竊にお後を附て往見届かば幾重にも充分お禮も爲す可きに夫さへ迂濶にせざりし妾ながらも過てり其方如何に思ふぞと女の方を見返れば娘も尙更宮本が姿優き耳ならず其身の難と救ひたる命の親共謂つ可く且又優れし腕前に前の

恐怖も忘れ慢身に染戀風の早春心さへ覺へしに悟られまじと側へ寄り御意遊ばさる如くにてお宿を伺ひ置たなら父上様と諸共にお禮に上る事も出来お招き申事もなり御恩報じも遊ばされんにお残り惜き事なりと路々互ひに語り合邸宅へころは歸りける偕宮本の此年秋の末迄も近き諸侯の城下に到り敵の踪跡を探れ共更に手掛りも非ずして又候江戸より立歸り竟に年を越て承應元年正月と相成始めの風邪の心地とて打臥たるが漸次に病ひの重り來て醫藥の効驗も無き耳か自分亦がらも危篤を覺へ最早此儘死するかと覺悟を究めて居たりしは神の救いせ給ひし者にや數人の醫師も見放したる其病ひすら日々に元へ復して遂に此年五月の初め全快致せし事なれば宮本の悦び大方ならず全く天神の救いせられしと自ら信じ尙も誠心と凝して祈念を込六月中旬に至りて江戸を立出此より奥羽の兩國を探らば若しや鈴木在所をも聞出す可き事も有んと最初野州に赴き宇都宮驛より到着し其頃龜屋甚兵衛とて驛中にも一二を争ふ至つて手廣き旅籠屋あるに左門之助も宿と定め逗留致せし其日の事隣り座敷の三個の力士が旅興行の返りと見へ皆口々に取組の物語り杯爲しながら酒宴を

設て居たりし折しも揉療治をば業と爲す山脇左一と呼者にて力自慢の男が來りお關取にの揉療治の御用は如何と云ながら酒宴の席に入來れば力士の斯くと聞よりも然を兎もわれ試に肩の當りを揉で貰いん力の限り揉すんを私等が體に効まじど脊を差向て扣へたり左一の忽ち諸手を掛肩の附より左右の腕と漸次に諸方と揉ながらお關取の體でも私が療治の一手と以て脊筋を強く撞ものなら堪へて居らるゝ事成るまじ夫共堪へて居給ふかと思ひも寄らぬ詞を聞き力士の莞爾と打笑ひ何程療治の術よても私等が體は見らるゝ如く磐石程に練へた身軀假令如何なる術か知らねどお主位の腕首にて力の限り撞む迎堪へられざる様にては天下の力士と言れんや万一堪へぬ其時の五兩の金をお主に進せん堪へた時の療治の代も拂ひを爲ぬが承知かと言れて此方も打笑如何にも承知仕れり然らば關取撞ほど堪へず聲を出されたら五兩の金と下されよ堅く約束を相固め脊筋と暫時揉居たりしが順て左一の力と込矢聲と共に撞たれば力士の痛さに堪り兼噫と叫んで倒るゝ計り此時左一の約束なりと五兩の金を受納めり此體を見て傍らある二個の力士の打笑吾こそ堪へて療治をば無代

で揉して遣らんず者と替る〜に脊を出し最初の如く撞せしが何れも堪へず叫びしよ仕て遣つたりと左一の悦び都合十五兩の金をを掠め徐々其場を立出たり三個の力士の呆れ果唯茫然として居たる耳此なる様子を最前より隣り座敷で宮本の始終の体を偵ひ居しが餘りと云ば彼奴こそ如何ある者か知らね共斯る所業を爲す事憎し率某しの試して見んと左一の廊下へ出るを呼入我等も療治を御依頼申さん且又力士三人迄堪へられざる術と云ふも是又試しと撞て見られ隣り座敷の客の如く堪へ兼たる其時の同く五兩を出す可し如何にと言れて左一の悦び又心中に想ふやう斯る柔弱の身を以て心太くも言し者か先其儀から飽迄も懲して呉んど打點頭又候宮本の脊を揉さげ脊筋の左右を撫さすれり此時力士三人の各目金を奪ひれしに無念と思ふ折柄なれば三個諸共廊下に立出片唾を飲て伺ふたり又宮本の小松の翁より傳授されたる柔術の身固の法を以て呼吸を定め待との知らぬ山脇が力と込て撞けるよ不測や恰も居眠如く自若と傲して居たるよぞ又も再三力の限り撞共押共驚く体なし這の口惜と立上り諸手を掛て搦と見へしが三間計り投出せり左門之助の投られ乍ら中よ疾

くも起直り閃りと立て冷笑汝が未熟の腕前にて斯る所業を爲と事憎し最早頭の無き者なり首の廻りを改め見よと言れて不審と思へ共何心なく探りて見れば小柄を以て襟元を縫留てころ有りけるに其勁捷に驚きたれ共不敵の者ゆへ恐る体無く又候搦掛るをば左門之助の捕て伏宛然磐石にて押へし如く身動きならねば斷と傲し悶へ苦む体なるよ宮本の聊か手を弛め尙此よても服さずば五躰を未塵と爲す可きぞ如何にと言れて今更に一言半句も有ばこそ首を疊に摺着て小生未熟の腕を持重ね〜の無禮と尽し何とお説の詞も御座無く何卒御免くだされ度私し事の土州浪人山邊大之進と申す者よて斯く接腹を業と傲し諸國を廻るも全くの仇を索る身の上あれど已よ本國を立去て十一年に及べ共未だ敵の踪跡も知す空く光陰を送る内身又貯へし路用の費し據無く斯くの仕合寔に恥入次第なり迎打測れて物語る始終の様子を聞取て我身の上へ引競べ漫然と憐を催ふして又大之進も打向ひ我等も諸國を廻りて同く仇を索る者あり幸ひ拙者は路用も尽す今日迄の罷在る就て先刻力士の衆より得られた金と返さる可し其代りとして某しが之を貴殿に進せんと金拾兩を取出し受納てと勤る

に力士の者への金子を戻し又宮本の勧めたる金を再三否め共押返されて己むを得ず大之進の厚意を謝し竟に金を受納めり

第十一回

借も宮本左門之助の思ひも寄らず旅宿に於て山邊大之進が履歴と聞くに早十一年を過せ共未だ敵の手掛りも非ずと聞世に薄命の者迎ひ我身計りと思ひの外我より星霜を累るは又氣の毒な身の上と歎息なして尙更も其餘の事共問ひも爲つ問われも爲して其夜を越し又の對面を約し竟に同所を立出此日原市驛に一泊し次の日日光山より上り途に神君を伏拜み武運を祈りて神殿及び社頭の景色見る者として眼と驚し善美を極めし紙筆に盡す事も能はず尙は神君の御武徳を追賞し其より中禪寺の庭内の勿論裏見ヶ滝冷泉池を一見し光陰を累ねて奥羽兩國を往來し鈴木の行方を探れ共更に手掛りも得ざるより此年十二月に至り再度江戸に立返り又年を越て承應二年正月とこそ相成龜戸村なる天満宮へ參詣せんと朝早くより旅宿を立出四方の景色を詠めつゝ餘念も無くして往掛る向ふの方より來りし武士往過ながら

振返り若しや貴君は宮本様か左門之助様では御座らぬかと聲掛られて立止り又誰あるかと面を見れば先年阿州の劔山にて一命をさへ救われたる獵人大作よて在ければ此はと計り打驚き如何致して江戸表へ出府致せられし耳ならず武家奉公を致されしや何は兎もあれ此の市中幸ひ向ふれ茶店に至り緩々其後の事共を物語らんと同道し一別以來の挨拶も互ひに述べて頼ての事又宮本の尋るやう當時の何れへ仕官をせしや定めて都合の宜きある可し我等阿州を去し後貴所の詞に隨ひて播州姫路に到りし處敵鈴木の居らずして妖狐の爲に誑され種々の難儀を爲し事より奥羽の諸國を歴廻れ共未だ行方の知れざる赴き搔摘んで物語れば大作の驚き大方からず私し事の強ち武家奉公を好みしあらねど又止難き事故ありて遂に阿州家の足輕と奉公住の致したなれ共牀の隙と云ふ迄にて却て手馴し獵師の方が遙に増かと存知ますれ共今更是非無く今日まで勤め續て居たりし故に斯く繁昌の江戸表を思ひ掛なく見物致し此らの事が仕合と一個て存知てゐる耳と互に盡ぬ物語り共内酒肴も來りし二個の此にて酒宴を設け尙は彼に角と餘念も無く過し事杯語りて居しが思はず大作の横手を

拍此頃私しの同僚よて加州の人と懇意の者あり屢互ひに往來もする又其者の咄しには近き頃加賀家に仕へし者は一刀流の達人とかよて鈴木源吾兵衛と名乗よし其年齢をも尋しに凡そ似寄し様子に御座れば若し源藏の改名して住込たるやも圖られず兎も角お探りあるべしと聞より宮本の飛立計り這は有難し忝けおし必ず其奴に疑ひ無く我等に於ても關東及び奥羽の諸國を探れ共更に手掛りを得ざりしが一度ならず二度迄も貴所の報知も預りて鈴木羽の諸國を探れ共更に手掛りを得ざりしが一度ならず二度迄も貴所の報知も預りて鈴木羽の行方の知れると云ふも是又奇なる事ありと再三再四深く謝し又の面會を互ひに約し此日遂に別れける其より宮本の龜戸村に到り宰府天満宮を九拜し何卒敵を討しめ給へと一身不亂又祈誓を込一七日の其間水指離を取つて行と爲し其満願も及ぶの曉き衣冠正き一個の老人何國共なく現れ出善哉々如何に宮本其方が索る仇たる者の當時北越の先よわれ共當年彼の地へ到る時の必ず三度の大難あり且其方の身に取て廿五才の厄ある耳か八方塞りに當るを以て必ず北國へ赴く可からず若し又此を破るに於て九死に及ぶ災害あるなり未だ時運の來たらねば身を慎みて在る可しと再三告しめ給ふと思へば此曉きの夢あるに左門之

助の奇なるを覺へ一個熟々以爲先に阿州の足摺山にて小松翁の警戒られしも今此夢と符合爲つれば我身に取て凶事ならんが假令廿五才の厄年あり迎仇たる者を討んと云ふ我精神を憐み給は、凶事も變じて吉事と爲し首尾能敵を討しめ給へ仇の手掛得る上は一日なり其安穩に争か差置事の能はん唯此上の一命を天に任せて彼の地に赴き探し出さで置べきと尙は天満宮を伏拜み江戸を立出宮本の中仙道輕井澤まで來りしに是より近き問道あり迎旅人の敷へに隨ひて道を轉じて急ぎしよ如何せしにや不思議も大ひに路を踏迷ひ信州淺間山の麓間近く來り字岩淵と稱へたる最凄然深山の其谷合の細道へ踏入たるが此處の別て樹木の生茂り白晝と雖も薄暗く木樵の者の折に觸此山中を往來はすれど旅人の通ふ路ならず樹木の枯枝の横り松の落葉に路をば埋め寂々寥々たる問道なるに左門之助も呆れ果又問へんよも人陰なく須臾イみて茫然たりしが斯てハ果じと氣を焦燥尙ほも小道と思しき處を足に任せて歩行しに岩間を傳ふて流れ出る清水を溜たる凹みし處を今往過んと爲す折柄走り出たる怪しの物が宮本目掛けて飛掛るに心得たりと身を替し抜より早く斬付たるが深く刃の立

ぬと見へ更に弱し体も無く益猛く荒廻る其疾き事譬へん様おし左門之助も一生懸命飛
 違へて挑みし内に忽ち毒氣を受し者よや俄然に手足へ癢を生じ働き自由を得ざるより這は
 又如何せし事か此場に於て撓おは此なる怪物に取喰われん残念なりと斷を爲ど又如奈とも
 する能はず脚蹠隙の有りし者にや忽ち怪物の飛掛り倒るゝ處を口に咬へ引摺おがら洞穴へ
 已に入らんと爲す折しも不思議や今迄宮本の五躰の癢て動き得ざるも心氣憤然として我よ
 返り勇氣十倍致せしよ持たる刀を取直し腹と覺へし其處へ柄も拳も貫徹よと撞上たるに堪
 へ得ず咬へし儘よ猛り狂ふを處擇まず刺貫けば竟に弱りて倒れたり宮本足下に踏据て又も
 數ヶ所を刺貫き漸く仕留て吐息を繼ぎ引摺出して改むれば口の尖りて細長く全躰の鱗の金
 色を現し其体魚類よして四足あり其大ひなる事頭尾よ至つて八尺餘り左門之助も驚く耳
 よて其何たるを辨へず須臾見詰て居たりしが又も情考ふるに此山鯨とか云ふ者おらんと
 尙蹴返して打詠め已よ其場を去んとす此時谷間の流よ當り何やら物音致すにぞ不思議の事
 よと宮本の四邊に眼を配る間も無く又一匹の山鯨が五六才ある小兒を咬へ此處へと驅來し

よ左門之助の飛掛り何の苦も無く打留て手疾
 く小兒を抱き上身内を見れば疵も無く氣絶致
 して居るよ付準備の奇薬を取り出し清水を汲で
 飲しむれば其藥効の著く忽ち蘇生爲したれ共
 何れの者やら相分らず居所姓名を問はんにも
 幼稚の者ゆへ辨へず唯泣叫ぶ耳おれを途方よ
 吳て宮本の今更見棄る事も能はず抱上し儘イ
 み居しが獨り熟々以爲斯く深山の谷間と雖も
 咬へて来る處を見れば必ず近きよ人家の有ん
 定めし此兒の親達の氣も半亂の如くにて無か
 し索ねて居るなる可し憫然の事よと思へ共今
 更行方の路さへ知れねば唯茫然とイむのみ此



左門之助

時數多の人々が獵人体の者を先に立手にく竹槍を提るも有り或の鋤鍬鎌杯を各自携へて
驅來り左門之助を見るよりも互ひに面を見合せて猶豫体に見へければ大音上て宮本は有り
し順序と物語り抱さし小兒を指示せば何れも安堵の思ひを爲し側に來りし其中より一人夫
へ進み出私し事の岩鼻村の農夫嘉右衛門と申者夫なる童兒の子息にて山紋の爲め奪ひ取
れ所詮死骸も得られずと覺悟の致せど追ての事に山紋を退治て敵を討んと俄に村の多勢を
依頼此深山へ入來し處思ひも寄らず子息に再生の御恩を蒙りしお禮の詞に盡されずと嬉
し涙を押し拭ひ左門之助より小兒を請取身内に疵も有んかと改め見れ共格別の怪我さへ無
に嘉右衛門の尙ほ嬉しさを飛立計り又此處へ集ひし者の山紋の斃れし況狀に何れも驚怖爲
す耳か又宮本の凡人ならぬを悟り大地に何れも平伏して神の如くに尊敬し此より岩鼻村に
伴ひ嘉右衛門の云ふも更なり所の農夫一同集り皆口々に深く謝し只管逗留を勸むれど僅か
一日此處に留り同所を立出宮本の村一同の人々が案内に隨ひ再度中仙道に出ければ此よ
見送りの者に別れ同國姥捨山の古來よりの名所なれば兎も角一見爲さばやと又候道を轉じ

て急ぎしが山紋を退治せし時受たる毒氣の残りし者もや手足へ又も瘡を生じ歩行の自由
任せぬ者から旅泊り於て治療を加へ空く光陰を送りて竟に九月の中旬に至り漸く全快致せ
しよを姥捨山をも一見し夫より尙も名所古跡の多ければ残らず見物爲さんとせしが思ひ返
して考ふれば我仇討の身を以て餘事の名地を探ると云ふの我等がからも過てりと自ら悔て
路を横切村井橋原打過て鹽尻驛に出けるが此より順序驛路を累ね奈良井敷原の間より右
へと切飛彈高山をさして赴さける

第十二回

穢々たる峯や谷川も幾重か越て今此よ長の光陰を打過し主従九人の旅の者四方の氣色を詠
めつゝ名所古跡の事共を互ひに語り隔さ合打戯れて泊りをも急がぬ旅の人々の當時加州の
内よても一と呼れし豪商人油屋忠兵衛と云ふ者あるが一人處女のお花を連手代喜兵衛に若
者出入の力士三人と此外物持二人を隨へ大和巡りの返り路はや本國よも遠からねば緩々國
へ歸らんと氣儘よ歩行來りしが飛彈と加賀との國界は至て嶮き山嶺と樹木の梢の繁茂して

白晝さへ暗き木下關當時暗日根咄と呼て往來の旅人も最稀別て毎日黄昏より山賊共の現れ出往來の者を害ふよし其噂さへ高けれど這の全くの事共思はず油屋忠兵衛親子の者並に力士等諸共に山の麓へ差掛れば旅人と見るより旅籠屋の男女の夫へ走り出是非よお宿を願ひ度殊より折々山賊の出る咄しも御座りければ早くお泊り遊ばせと替るくよ勤るより娘お花と忠兵衛も旅宿の勤めを随ひて已泊りよ就んとす此時力士三個の者片類も笑を含みつ其場へ進みて云るやう未だ時刻も早くしてお泊り爲るよ及び申さず且又賊等の十人や二十人の出れば迎私し共の三人がお側へ従ひ在るから山賊共を打懲し旅人の害を除く可しお必遣ひの御無用と左も潔く述ける中よも三保松清五郎の一層勇み進み出小賊共の出るに未だ日も高き事あれば此なる味をお越さされよ又假初も私し共の天下の力士と呼るも者が賊の出ると聞よりも泊りし杯と後日よ至り多くの力士よ云れて何面目の御座る可き若し盜賊の出るに於て日頃の力を現ひして一人残らず打殺し旅人の害を拂ふ可し必ず心配遊ひされず私し共の勤くを片邊に於て御覽せられよ聊か氣遣ひ爲給ふなと一個が言は其

餘の二人も三保松に詞を添是非く味をお越さされよ左すれを翌日の泊りも宜しと頻りに勤め立られて然らむ斯く迄力士の衆が受合下さる事おれを少しも恐怖事も無し娘よ心配致すと氣を勵して忠兵衛の小休おせし茶代を與へ旅宿の主人男女の者が留るを聞ず打建立咄をさして上りける已に二里餘も来りし折柄はや日も西に傾きて梢へを翔る小鳥さへ啼音も絶へて最寂しく谷間に流る水音の又沆々として凄然見通し難き山道なれば心細く思へ共今更後への戻られず早く峠を越さん者と急ぐ折しも横合より現れ出たる十四五人何れも異形の打扮にて行方の路に立塞り路金の残らず衣類まで命が欲くば渡して仕まへ兎や角言は斬殺さんと藤柄卷の山刀皆一同に抜放ち押取圍むと見るよりも三保松に玉手山岩戸川の三個が大口明て冷笑命知らずの山賊共余の旅人と事替り己れ等如きが出れば迎驚く様なる者に非ず望む處を覺悟をせよと言つ力士の三人の手の松を根拔と爲し群り立たる山賊を右と左りへ打振立宛然仁王の荒たる如く無二無三に打倒す其勇力に當り難くや須臾賊等も戦ひしが右方左方よ逃亡たり此働きを忠兵衛初め恐怖なから詠めて居しが賊徒

ハ半死半生にて行方知れず成ければ何れも安堵の想ひを爲し少しも早く此山を越さんと
一同立上る折柄又もや數多の賊が再度此處へ押寄たるは前に力士に打立られ散亂なしたる
者共の斯くと注進致せし者にて又此山を栖となし賊の張本と仰がれたるハ福島左衛門大夫
正則の浪人大山太郎照國とて力量頗る優れし耳か鎗術の奥儀を極めたる大膽不敵の曲者な
るが今此處へ馳來り鎗取延て立向ひ能くも手下の者共を打懲したる其返報我手又掛つて往
生せよと聞より力士三個は高の知れたる賊徒の張本唯一打と勢ひ込三保松を始めとして大
山太郎の左右より打て掛ると者共せず宛然飛鳥の如くにて受つ流しつ遇ひしが一聲叫んで
飛込様又鎗の鐵把直し突よと見へしが三保松は急所を撞れ氣絶致して倒れける此を見るよ
り二人の力士は眼前の敵遁しせずと益力量を相現し一心不亂に戦へ共大山太郎は賊な
がら武術の優れし者なれば何かは以て堪る可き玉手山久太郎岩戸川浪之助も共に急所を突
れしより眼眩みて齒を喰しめ息の根留て倒れけり照國莞爾と打笑腕立致す此奴を一時氣絶
を爲しめたれば最早妨げ爲す者非ず者共來れと云ながら徐々步行近附に忠兵衛始め其餘の

人々杖柱とも頼みたる力士三個が倒れし何れも生たる心地も無く齒の根も合す踞り兩
手を合して伏拜み震へ慄く計りあり此時大山太郎に於てハ娘お花と見るよりも手下の者よ
差圖を爲し疾く岩屋に連行べし我等が妾よ致さんと泣居る娘を抱上させ拘引ん体なるに
忠兵衛我身も打忘れ小賊共へ縫り付所持の金錢衣類まで差上ますハ厭はねど娘計りは免
われ慈悲じや情じや拜み升ると取縫る迎聞ばこる命知らずの山賊等が悲命を發して泣叫ぶ
娘お花を擔ぎ上情け用捨も荒鷲に捕へられたる小鳥の如く岩屋をさして連行れり忠兵衛今
ハ氣も狂ひ心も亂れし如くよて娘の後を追ひんと爲すを大山太郎ハ引留め諦めの無き此の
老朽如何ほど歎き吐く共奚ぞ再度返さんや其より所持の金銀を殘らず此に出す可し命計り
ハ助て遣らんと云つハ忠兵衛を縛り上又も片邊に伏轉ぶ手代喜兵衛も若者物持までも縛め
て路金を入し行李ハ更なり兩掛其他の手荷物まで手下の者に擔がせながら已ハ其場を去ん
とせしと思ひ返して立留り此奴ハ並の買人ならずと最前よりして見留しが此なる行李の印
を見れば加州家の用達油屋忠兵衛と覺へたり此蓋を生して返さば必ず加州へ訴へ出ん然

る時に金澤より捕手の人数を向るの必定憫然ながらも斬殺し後日の憂を除かんと又も徐々立戻り手下の賊等も申付首打刎よと下知させば鬼共見紛ふ荒男四五人夫へ走り寄り藤柄巻の山刀抜と見るより忠兵衛は身を震ひして泣叫び蹠踏かして打歎き此儘お放ち有る迎も決して他言の致さぬ故に命計りはお助あれと聲を震ひし身を悶へ又遁れんも縛めの繩に掛りて繫れたれば白刃の首に臨むを待より外もあらざりける大山太郎は此を見て大口明て冷笑いつ迄吐き叫べば逆生置難き奴なれば念佛申て往生せよ其代りに娘をば此の照國が妾と爲し長く寵愛致して遣いす是を冥途の土産と聞て淨佛せよと罵りつゝ手下の賊へ目配なすに其意を悟りて小賊共の新身の剛刀振かざす身の白刃の下に居て最早忠兵衛の命の夜明も残れる燈火の風を待つより尙ほ危ふし却説宮本左門之助の飛弾の高山も何時か過ぎ暗日根峠に差掛れば旅人と見るより旋籠屋の主人の其へ馳出し旦那様よ此山を今から越しあらんより今宵のお宿を願ひ度是非よと請ひれて今更に急がぬ旅の事なれば左門之助の立寄り然らば一夜のお世話も成らんと云つゝ此家の慶頭に腰打掛た折柄も主人の又も

側へと來り最前加州家の御用達油屋忠兵衛と申さる御人が都合九人のお連にてお休息さされし事なれば峠へ賊の出る趣きお知らせ申上たれ共お連の内なる力士の衆が山賊杯の出来ば逆少しも恐るゝ事も無し未だ日も高き事ゆゑ山を越さんと勤められ竟もお立なされしが定めし急度今頃多くの賊も取圍まれ難澁せられて御座るべし旦那様にお泊りして明日緩々お立であれを御氣遣ひの御座りませすと咄すも世辞の一つあり斯くと聞より宮本の主人に向つて云るやう井の又容易あらざる事あり我聞ずんば兎も角も聞たる上の棄置れず力士の身分を以てさへ賊の出ると聞よりも勤めて出立致すと云ふの實も見上た精神なり我等此より追附て万一賊等に圍れ居らば助けて遣らんと立上り茶代を其處に投與へ後をも見すも馳出し闇日根峠の絶頂目掛息をも継ぎ上りて來しと谷間も中りて泣叫ぶ女の聲を聞か否借こそ賊等の手に捕れ難儀致して居る者あらん猶豫のならじと宮本の聲を知るべし馳下れば小賊共のお花を擔ぎ岩屋の方へ行んと爲す其形勢を見るよりも走り掛つて打殺し手向ふ者を右左り手玉の如く投出せり不意を打れて賊徒等の皆散々も逃亡たり左門之助の泣伏

たる娘お花を抱起し最早恐るゝ事無し連の者等は何れもあるや様子如何よと問ひ掛られ涙赤がらふ云々と物語るとバ聞よりも左門之助の娘を抱へ取て返した峠の絶頂汝が恐怖も須臾の間此處又潜みて待居よと生茂りたる熊笹の中にお花を匿し置尙は一散又馳來り遙向ふを見渡せば已は油屋忠兵衛の後へ廻りし小賊が首を刎んと爲す体に馳付隙もあらざれば手頃の石を取より疾く狙ひ外さぬ早速の眼潰し不意を撃れて眩き後へ又堂と倒れける此間に透さず飛込來り矢庭又一個を斬倒す其勁捷に恐れしや小賊共の躡ふ体は大山太郎の現れ出己れの何國の者か知らねど能も妨げ致したり我手は掛つて死亡と鎗取延て突掛るも心得たりと宮本は松の古木を楯と取り憎き賊首の廣言かな我こそ天なり替り汝らが首を打落さん覺悟よ及べと云ながら頭上を目掛て斬付る鋭き太刀を掻潜り焦て突出す鎗先を受つ流し何秘術を盡し一上一下虚々實々互ひに劣らぬ手練の勁捷刃を交る形勢は宛然電光石火の如く人交もせず戦ひしが大山太郎の屈せず突立來る手練の精妙流石の宮本左門之助も次序は太刀先亂るゝ耳か其鎗先を受兼て後へ〜と突立られ已に危ふくなりけれ



この這の口惜や此奴の爲め果敢なき最期を遂るかと思へば尙ほ更氣力も衰へあはや斯よと見へける折柄不思議や咄と吹起る風を避んと振向は後の平地の松山あるに此屈竟と馳入ける遁しはせずと照國も續いて追掛来りしは仕濟またりと振返り勢ひ込て立向へを賊首も大喝一聲叫び七離七合戦ひしが鎗の鐵さ木毎又支へ働さ自由を得ざるより扱は彼奴の謀計に釣られたか遺憾と悔れど猶豫の有されば茲を先途と戦へ共勇氣挫て鎗先亂れ自と後へ退くに得たりや應と宮本の附入附込斬立る其太刀先の鋭さに避んと爲して不圖も松の根方又足蹶さ倒るゝ處を透さず飛込左りの腕を斬落せり切れあがらも強氣の賊魁起んと爲すと首打落し尙ほも前後に眼を配れど最早逃亡たる者か殘賊一人も見へざれば刀の血と押拭ひ鞘よ藏めて宮本の忠兵衛初め其餘の者等が縛められたる繩を解片邊を見れを力士の三人斃れ伏て居るに驚き側へ立寄り改むれど身内に疵の非ずして全く氣絶と覺ゆるに替るゝ抱き起し活を入しに蘇生唯茫然として詞なし此時又も宮本の圍し置たる娘をも伴ひ來りて引渡せば忠兵衛親子の夢かと計り餘りの事れ嬉しさに我を忘れて取継り先立者の涙よて須臾詞も

有ざりける漸く有りて忠兵衛初め大地へ頭を摺付て離君様かの存知ませねとお助下され有難やと異口同音に述べたる儘皆平伏て居たるのみ左門之助の腰打屈め哇や何れも其様に平伏せられて在る時の拙者に於ても當感致す最早賊等の居らざれば聊か氣遣ふ事は無し我等の最前籠り於て其元達の事を聞き方一賊徒に取圍まれ難儀せられて御座るあらお救ひ申さん其爲め又急ぎて來りし甲斐ありて我等も満息致せりと詞靜かに述べければ忠兵衛漸く頭を擡げ宿所名前を打明し私し諸共九人の者命を茲よ棄べき處一人残らずお助下されお禮の申盡されず此御厚恩は死後までも誓つて忘却致しひせずと又も頭を地につけて演る右より左りより伏つ拜みつ打悦ぶも又道理と知られける此時忠兵衛の懷中より百両包みを取出し此の甚だ失禮なれ共御覽の如く旅中の身の上差當てのお禮のみ平に御受納下されと恐るゝ差出すも左門之助は打笑某し禮物を得ん爲よお救ひ申せし者ならず小生連も聊かの路費は所持なし罷り在る筈を謝物と受べきや心遣の無用あり早黄昏よ及びしなれば疾々此處をお立あされよ若し又賊等の來りもせば由々敷大事と相成べし我等も此儘發足せん御縁も

わらば又其内對面致し申べく何れも去べと立上るは忠兵衛初め其餘の者俱に謝物を勸むれ
共手にさへ觸ねば是非も無く唯平伏て拜すのみ中にも油屋忠兵衛は膝進ませせて打向ひ迫て
の事御尊名を仰せ聞られ下され度と只管請ふて止されば餘儀無く姓名を相名乗別れを告
て立去りける

第十三回

山高み中央を埋む群雲に路急がれる雨催暗日根峠を去りし後左門之助の旅泊の夜俄然に大
熱の相發し其翌朝に至れ共發足すべき氣力も無く竟に日敷を累ねしが漸く本腹致せしに此
家を出立なしたる頃の冬の初めの日和癖とて雲ゆき脚と見る儘に山風荒く時雨來て降み降
ずみ旅の空已に寒氣を受しにや又も持病の再發して歩行の自由あらぬ共苦痛を忍びて漸々
と金澤城下へ程近き小清水村まで來りし折柄一層苦痛の愈増て最早一步も進まぬ耳か忽ち
其處へ眩き倒れ伏たる此時に通掛りし老人の居酒渡世の庄兵衛とて慈悲善言を心掛虫
さへ殺さぬ性質なるは誰云ふと無く佛庄兵衛と呼さされ人に知られし者なるが今不圖も宮

本の倒れし体を見るよりも漸くにして脊負つゝ我家又伴ひ返りし上老の夫婦の一心に醫師
よ薬と駈廻り介抱致す誠心の届し者か宮本の其翌朝に及びてより漸く心氣我返り始めて
此家に伴われ介抱受たる事をも悟り只管夫婦の厚意を謝して此處に日と累ぬる事十餘日に
及び漸く起居の自由なるに至れ共未だ氣力の衰へて歩行も心の儘ならぬは庄兵衛夫婦のま
すく忠實な能く仕へ晝夜を別たす看病し尙ほ此上にも緩々とお心遣ひの遊ばさず御養生
の然るべし又何なり共御用の儀の御遠慮の無く仰せよと替るゝに慰る夫婦の心に絆さ
れて又も日敷を重ねし内遂に霜月の初旬となり本腹せしにあらぬ共大ひに氣力も整ひたれ
ば日毎に最寄を徘徊し若しや敵の手掛りを聞出すべし便宜もがかと心を附て見廻る内或る
日宮本の朝早く豫て庄兵衛より聞得たる近き名所を探らんと其處此處と無く散歩して竟に
の歸路を取違ひ夜半及んで漸々と庄兵衛方へ歸りて來しが何やら家の群集して物騒然体
なるに不審ながらも宮本の勝手の方より入らんと爲すに待設けたる捕吏の多人數御用の聲
と諸共に有無をも言せず縛めたり其翌朝に相成と奉行原田軍次兵衛の法廷に出席致す問も

無く左門之助を呼出し眼下と睨て糺問やう其方の何國の者にして又姓名を何と申や逐一白
狀致すべし已は昨夜小清水村にて居酒渡世庄兵衛夫婦を切害し金子二十兩衣類六品を奪ひ
取しは其方からん汝ぢの是まで庄兵衛方に先頃中より世話になり逗留なして在し由其大恩
を受ながら斯る大膽を働くの人面獸心と謂つべし其天罰の眼前斯く召捕れたる上からの如
何ほど偽り陳ずる共争か免れおうせんや疾々白狀致すべし如何にと計り糺問せられ左門之
助の頭をさげ出所姓名を申述私し事の仰せの如く庄兵衛夫婦の情を受漸く全快致せし者よ
て已に出立すべかりしを達て夫婦の留るに隨ひ尙は逗留の致せし者の日々諸所を徘徊し殊
も昨日は夜半に及び歸宿致せし其折柄存知も寄らぬ冤罪をうけお召捕りは相成たれ共其場
も於て私しの身に聊かも覺への無き故申披きを致さんにも御捕吏の諸君よの有無をも問ひ
す縛められ御拘引もかりたるが私しの所業ならざる証據の所持の大小を御改め下さるべし
且又庄兵衛夫婦の者を殺害致せし者なれば争か安閑として立戻るべき此邊を篤と御賢察下
されおば拙者の所業にあらざるの直ちに分明仕ると詞爽か又陳けるを軍次兵衛の聞答

め汝ぢ斯く逆詞を工み犯せし罪を遁れん逆突ぞ此儘免さんや如何にも其方が大小にの怪さ
處の見へね共庄兵衛夫婦の受たる疵の出刃庖丁の類を以て突殺したる者なる由左すれバ刀
脇差とも怪き事は無き筈なり又殺害致せし者が立戻るへき謂れ無きと雖も其方所持の手持
物を残し置たる事ゆゑに其夜の内に立戻り持去んと致せしなるべし然る時は其方が飽ま
で陳じ偽る共申披きの相立難しと此日の入牢おさしめたり扱又原田の宮本を賊と見認て召
捕せ帶たる両刀を取上て中身の勿論拵へ逆突と改め詠るに皆尋常の者ならねば獨り心に思
ふやう渠は如何なる身分の者にて斯く名作の両刀を平常帯て在る者や如何にも爲して我
手よ入なむ子々孫々の寶あるべし然りくと點頭つ、工夫を旋し有けるを折しも鈴木源吾
兵衛の入來り少しく願ひの事ありて參上致せし赴きを申入し軍次兵衛の直様奥の一室に
通し鈴木氏よの夜よ入て如何ある御用の有りしよや具に仰せ聞られよ拙者の愚息の餘人と
替り別段御指南を受けるゆゑ何の禮も致さんと心よ存する折なれば決して御遠慮よ及ばぬ
間願ひと云ふは何事なるか家族の者も居らざれば傍に氣遣ひ爲給ふなと心有り氣な詞を聞

源吾兵衛の小便を進め斯くお奉行のお詞に小生大ひよ有難し今更何をか裏匿さん實の先
 年私しが石州津和野に在る砌り宮本勘解由と申する者と武道の事より争論し竟に討果して
 立退しよ其奴の悴左門之助と云る者我等を敵と附狙ひ諸國を廻る趣きは疾よ承知を致せし
 が先に不圖途中に於て渠を見當申せしなれ共僥倖彼奴の拙者を見留す併し御當家に在るを
 知り索ね來りし者ならんと夫より易き心も無く去り迎聊か宮本を恐る、譯には御座らねど
 訴へ出る事も有りさば大ひに名義を失はんと唯それのみと心痛し今日迄も罷り在りしよ今
 回貴君の御吟味あるは佛庄兵衛を殺害し金錢衣類を奪ひし賊にて宮本左門之助と申よし承
 知致して取敢ずお願ひ申に出たるあり何卒尊君のお見込にて拙者の安意致すやう御計ひを
 願ひ度此儀を聞濟給はる上へ拙者が武術の奥儀をも御賢息へ御傳授申御家中諸君の多しと
 雖も誰も及ばぬ御手練に必ず御教授申上御恩報じを致さんと始終の事と打明し頼みを受けて
 軍次兵衛は莞爾と計り打笑如何にも其儀は承知致せり貴殿の御安意なるやうに急度計ひ申
 べく其替りには只今の御誓言に違ひ給ふなと互ひに固く誓と爲し尙は彼に角と兩人の數刻

の間密議を遂夜陰よ及んで別れしを誰迎知る者あらざりける其翌日と相成ければ原田の法
 庭へ出席し左門之助を呼出し如何に宮本庄兵衛夫婦を殺害し金錢衣類を奪ひしなるべし今
 日白狀致さずば手強き拷問よ及ぶべし心を定めて申立よと尖き糾問を受たれ共身に寸毫も
 覺へぬ事ゆゑ奉行原田よ打向ひ已よ昨日も申上たる如くよて大恩人なる庄兵衛と争か殺害
 致すへに殺さぬ証據の留守中に斯る變事の有り共知らず戻りて來る處を以て拙者の身よ取
 り覺への無さを御賢察の程願ひしくと陳るを聞より原田の憤り己れ大膽も奉行よ向ひ不
 埒の言上に及ぶ者かお汝等の所業で有る無さを吟味致すが職務なり如何ほど偽り陳する共
 欺かる、某しならず全く其方が殺害せし疾より見貫罷り在る白狀せすば言して見せん者
 共準備よ及べよと鋭き下知を受るより左右に扣へし同心等が吠と答へて宮本を木馬の上よ
 勝からせ両足へは大ひなる二つの石を結付て前後へ數十度引廻すに何かは以て堪る可き臂
 の破れて血の流れ左右の足の振るが如く然共聊か聲とも發せず苦痛を堪へて言ひねば原田
 のさすく烈火の如く眼を見張て憤り彼奴手弱き拷問よて容易白狀致すまじ今度は石を

抱せよと下知の詞も畢らぬも情用捨のあらばこそ又も多人敷立掛り木馬の上より引下し替
るく宮本の膝に數多の石を積前後に於て搖動かせば如奈ぞ以て堪るべし下の小砂利を
敷詰たる上に坐したる事なれば牀は未塵も崩る、計り血の滾々として流れ出れど此又苦痛
を忍びて一言も發せず竟はうんと仰反て氣絶致せば氣付を與へ蘇生致せば白狀せよと呵
責に逢ども宮本は身に覺への無事事ゆる假令此儘責殺されても杯か盜賊の汚名を受べき
如何ほど拷問に掛る共冤罪の爲に刑せられんや殺さば殺せ責らば責よと心は誓ひて言はず
原田は日々用捨あく七日の間拷問せし早宮本の一命の今にも消る計りなり此体を見て軍
次兵衛心の中に思ふやう今一度釣し上なば必ず絶命致すべし然る時の鈴木より頼の事も成
就なし我取上し兩刀も人知れずして手入るこそ之兩端の計策ありと竊に獨り打悦び又翌
日となるが否左門之助を呼出し一層手荒な拷問せんと夫々用意なさしめたり此時までも與
力の出頭田坂彌十郎も陪席し日々の吟味と詠めて居しが奉行原田の調べ方手荒の事を専ら
にし不審の事共多くして已に一言を發せんと思ひ詰ては居たなれ共何を云ふにも上役なる



奉行の權威を罷むを得ず差扣へて在りけるが最早今日宮本を釣しの拷問を掛る時必ず絶命致すべし棄置れずと心を決し原田に向ひて云るやふ某がし不肖の身あれ共愚存を言上仕らん憚り多き事ながら熟々宮本の人品及び言語の様子を偵ふ處中々人を殺害し賊を働く者共思へず万一外より賊の出なば此奉行の越度にして且又日々お手荒き拷問のみをせらるる故身軀斯く迄瘦衰へ最早餘命の有り共存せず然るも又々拷問なさらい必ず命を失ひ申さん渠白状と致せし後絶命なすの宜けれ共未だ服罪せざる内万一の事有りし上渠が舊藩津和野より事實を糺して御當家へ掛合れたる其時の容易ならざる事なるべし拷問のため殺しなば此奉行のお耻辱ならずや能々御賢慮有り度と申陳るを聞よりも原田は大ひに怒色を現し我等の假も奉行あり善悪邪正を糺すを以て我職務と致するからん看認る處ある故も嚴重糾問者なり然るを笑ぞや其元への罪人宮本を冤罪と見做し外又賊の有んと以ての外ある所存なり且又舊藩津和野より彼是申越とても恐るゝ事の何かあらんや其上からず某の職務に就て越度のあらば割服致す我心底吟味濟に及ぶ迄決して口外爲給ふなと氣色

を變じて無法の云分彌十郎も呆れ果心中大ひに怒りしなれど討論するも無益の事と其後の黙してある程も原田の又も指揮を爲し疾く拷問に及べよと申渡せば酷吏等が最早生たる体も無き左門之助を縛り上左右の足にの重石を結付車仕掛で引上たるが前後へ屢揺動かせを骨は折肉も破るゝ計りあり然共一言半句も發せず斷りなして息絶へたり夫と云ふより引下し氣付を與へて介抱すれ共稍半時も心付ず氣絶の儘にて有りければ仕濟したりと軍次兵衛の心の中は悦びける彌十郎の斯と見て自ら其場へ馳出し醫師を招きて諸共介抱すれば宮本の命數未だ盡ざる者もや稍く有て眼を見開き又其儘眼を閉て宛然死人の如くあり此体を見て彌十郎又も原田に打向ひ最早御覽せられし如く此後手荒き拷問にての助るべく共存知申さず唯此上の願ひの明日限り私しへ御吟味仰せ付られれば必ず白状致させ申さん平又聞濟給ひるべしと思ひ込だる体あるも奉行原田は打笑某し日數を費して拷問させ共白状せぬを貴殿が一日糺さは逆争か罪に服す可き望みとあらん兎も角も吟味致して見らるべし明日罪も服さぬ時の脊を裁割て鉛の熱湯を流し込假令絶命致す共苦しからぬと其元にも

篤と心得置れよと最巖かに云渡之此日の退席致しける

第十四回

亦説く宮本左門之助の獄舎の柱に打凭れ最早生たる心地も無く假令此儘死する共杯が賊名を殘さんや翌日の鉛の熱湯を脊を截割て流すとやら日毎に苦痛と爲んより寧の事に死するが増しと已に覺悟を致せし者の敵も討得ぬ其前冤罪の爲て死するとい我はど薄命の者もあらず思へば尙も無念さに斷をすれど今更又遁れべき術も無く是昔前世の因念と獨り心に覺悟して死する此身の厭ねど未だ鈴木の實否も知らず果敢なき最期を致しなば草葉の陰にて父上や又伯父君の歎かせ給はん之を思へば死もならず如何せむやと當代に一二と呼るゝ豪傑も奸吏の爲に捕へられ悲歎も咽ぶぞ憐れあり偕て又田坂彌十郎の其身與力の出頭なれ共奉行原田軍次兵衛とい雲泥黑白の相違にして智勇も優れし武士あるが左門之助の冤罪を悟り如何もなして救はん者と心に思ふ處より原田又請ふて明日の自ら吟味に及ぶなれ共一旦罪に服させずバ助る道も無き者と種々も心を碎さしが夜半に至りて潜かに獄

舎の口に来て見れば牢番の者三人共はや消殘る火鉢を圍み震ひ凍へて居る体も彌十郎の進み寄り牢番の衆御苦勞と聲掛られて心附忽ち形を改むを其儀に及ばすと押し止め喚かし寒氣の堪へ難かるべし我等の夜中見廻るも是又職務の事なれば各々方をもお察し申す此の甚だ些少なれ共三個の衆も進ずれを寒さを凌いで参られよ拙者の篤と宮本の疲れし体を見届おれば後へ決して氣遣ふなと深き情の詞に悦び牢番三個の平常より馴初の酒屋に馳入て貰ひし金にて飽までも酒食をちして居たりける却説田坂彌十郎は牢番の者を遠避て必易しと唯一個獄舎の内へ入が否哇や宮本氏左門之助殿心を儘に持ひへ宮本氏と聲掛られ眠り居しよの有ね共氣力の疲れて横ばり前後も知らず有りたるに誰やら我名を呼ぶと思へば稍くにして起直り田坂の面を見るよりも貴君の如何なる御用よて深夜を厭いせ給ひぬ耳か此獄内へ御入來ありしや死を決したる小生あれば少しも早く我首を刎て苦痛を通るやう願上ると云ふさへも秋の霜夜に音を立し虫の聲より憐れなり彌十郎の腰打屈め某し夜陰に來りし貴殿の命を救ん爲罷り越たる者あれば決して疑ひ給ふ可からず全く冤罪と存知たされ共奉

行あらねど是非も無く差扣て居りたるをれど明日罪に服されずを鉛の熱湯を脊よ流され
必ず落命せらるべし一時賊名を受る共明日法庭に出られれば殺害致せし赴きに屹度服罪を
さるべし然る時に當家の法よて再度獄舎に移し替三十日を過ぎれば所刑を爲ぬ控あり此
間に拙者が心を碎き實の盜賊を搦捕貴殿の冤罪と救ひ申さん奉行原田は如何なる事にや拙
者の諫を聞入らず日々手荒き拷問に及び歿命せらるると待つ体にて太だ不審の事共多く今更彼
是討論あすも採用ゆべき者あらず夫故竊に忍び來て我精心を打明し助命の手術を能く示し
善惡邪正を飽迄も糺す我等の誠心あれば一端罪に服する共一時の事ゆゑ宮本氏必ず翌日の
服罪せられよ左も無き時は明日限り貴殿の命の無かるべし我神佛に誓ひを込助命を謀る精
心あり疑惑せられず某しの詞を信じ給へよと再三再四繰返し會得せしめて彌十郎の尙も彼
に角示す折しも最前酒店に到りたる半番三個の返りて來しに別れを告て立去ける後にて宮
本左門之助の夢かと計り打惚び斯まで我を助んと謀り給ふの嬉しけれ共身に聊かも覺へ無
くして殺害致す耳あらず金錢衣類を奪ひし賊と諸人の口に掛るも口惜又三十日の其内又寔

の賊の出ざる時の無論我身の所業とあり後世穢名を残すは必定夫より拷問の爲死を遂て苦
痛を早く死れんと想ひ返して宮本は又死せんと覺悟をさせり然るに時刻も順序に移り丑
滿すぐる頃ありけん何國共無く梅花の薫り鼻を貫く如くよて不思議と思ふ間も非ず咄と吹
來る風諸共に忽然として現れし此普神の靈あるか衣冠正き姿よて左門之助に向いせ給ひ
如何又宮本其方の囊に靈夢を受あから其を破りし事に依り今回の大難も陥りたるあり未だ
汝ぢの知らず有りしや已に一命を失ふべき山賊の爲に毒氣を受其場よ於て喰ひれべきに
力を添て討したり又其次の暗日根峠に賊首大山照國の鎗先よ掛りて死すべきを後の松山に
引入させ是又首尾能討せしかり今當國に踏入て此大難を受ると云ふも自業自得の事ながら
餘りの惘然と存する故今回の難をも救ひ遣す就ての先刻其方に堅く誓ひて立去し彌十郎の
詞を信じ明日こそ其冤罪に陥り自然と汝ぢの一命の助る事に至るべし我云ふ處も隨はずは
必ず命を失はん夢々疑ふ事勿れと宣ふ聲も爽かに屢説諭せられしと思へば夢の覺にける
餘りの不思議と宮本の唯茫然と柱に凭れ又熟々と考ふるに今の全く夢あるが最前態々來

られしに儘に田坂彌十郎殿我一命を救ん爲御入來ありし趣きあるが是彼思ひ合すれば最も
 奇怪の夢あれ共五臓は勞れと生せしより斯る夢をば見しあらんと心に留す有りけるが尙又
 情 再考するに夢中ながらも馥郁たる梅花の薫りを覺へし耳か岩淵谷にて山鯨を退治し
 たる其時と暗日根畔に賊の張本大山太郎を敵手と取已に危ふき折迎も救ひし事と夢ながら
 告させ給ふと覺ゆれば左門之助の今更に疑ふ心も此に暗應有難や勿体なや某し江都に在る
 砌り三度大難を受るといふ正敷靈夢を蒙りながら破りし御罰を受もせず又も我身を憐み給
 ひ救ひせ給ふ者あるかと感涙袖を浸すが如く夫より尙も宮本の天満宮を伏拜み待つ間も非
 ず何時かに其夜も明し事されば奉行原田の早朝より彌十郎を抜て其身一人出席し今日こ
 そは是非共に拷問の爲絶命させんと腹又工みし事されば左門之助を呼出し唯一言の吟味も
 せず鉛の熱湯と流さんと夫々用意を爲しめたり斯共知らず彌十郎の出席致せば宮本を已よ
 拷問に掛んとする其形勢を見るよりも原田の側へ進み寄り某し昨日願ひし如く今日の處の
 小生に御吟味仰せ付らるべしと云棄た儘宮本の間近く進みて打向ひ其方此まで白狀致さず

覺へ無きと申立るも佛庄兵衛夫婦の者を殺害
 せしと相違あるまじ何はと偽り陳する其所詮
 遁れぬ汝の罪科疾く白狀に及ぶべしと云渡
 されて宮本の頭を擡て面を見る彌十郎にて
 有りければ思はず涙を浮べつゝ何如も私し
 是迄の覺へ無き旨申上しが斯ある上は是非も
 御座無く逐一白狀致すべし全く庄兵衛夫婦を
 殺し金銭衣類を奪ひ取逃したれ共手荷物と
 れし儘立返り持去んと致せし處を御召捕と
 相成て今更恐れ入り奉る唯此上の一日も早く
 如何なる嚴刑も處せられ度と竟に服罪なし
 たれば原田の悦び大方ならず且又彌十郎が調



ぶる間も無く忽ち罪は服せしを又怪しみのあしたれど白狀致せし事かれは直ちに口書押印を濟せ直様溜りの囚獄へ移さんとはせしかれと獄舎は差支の有りたれば其儘措き竟る年を越し承應三年正月八日と相成ける却説當時名も高き三保松清五郎の弟子三人を供に連春興行の相撲場へ急ぐ向ふの横町は往來も留る群集の人は何事あるかと立留り様子を聞かば去年の冬小清水村の庄兵衛を殺した賊が罪に陥柳小路の牢屋敷へ今送られて来るありと事の次第を聞よりも三保松は弟子等に向ひ今日が初日の出先に於て思しき事を聞く者か私に宜けれどお主等へ出世前の體ゆゑ囚人杯の見るあよと云聞ながら横町へ路と轉じて急しよ不思議や雪駄の前緒が切しに縁起の悪ひと吻きながら持せし木履と脱替て進ぬ心を自ら勵しはや大通りへ出んと爲す曲り角にて不圖も最前避たる囚人又もや磔と行合て最早避べき暇も有ねば是非あく其處に立留れり此時數多の人々が前後を圍みて來りしに見るとはあしに清五郎の實の上に乗られた彼の罪人の面を詠め身震さして行過けるが思ひ返して立留り熟々考へ見る處姿形の替れ共昨年閏日根峠に於て一命をさへ助られたる宮本様に面体の能

も似られた人あるかと思ひし見れを何と無く胸騒きして止まざる耳か今朝結立の髪あるに上元結の切たれば愈以て打驚き扱ころ今の疑ひ無き宮本様に有る故に一度あらず二度迄も不思議を見せて神々の知らせ給ひる者あるか何にも致せ姓名と聞亂さんと脚ふ折しも通り掛りし牢番体の人を見るより懇切に其名を聞ば豈圖らん左門之助に相違なく其事柄も聞が否三保松の仰天し宮本様に限りて人を助けの爲る共僅の金に眼の眩み居酒渡世の者位を殺すやうある御人又非ず是に就ては必ずしも深き仔細のある事にて冤罪に陥り給ひしあるべし猶豫はあらじと引返し玉手山の家にと來り案内もせず馳入は此時岩戸川も來合して二人侶俱打連立此より場所へ行んとする身支度なして居たりしが兄弟子三保松が尋常ならぬ見相にて飛込來しに打驚き頭を見れば亂髪ゆる喧嘩にても爲れしかと右左より問けるに清五郎の頭を打振お主等二人又問ふ事あり一端命を救われたる大恩人の方一にも冤罪の爲又一命を棄給はんと知るからに其時二個の如何致すや返答次第は火急の大事申聞する事ありと思ひも寄らぬ一言に玉手山には岩戸川二人諸共進を寄り如何ある事か知らぬ共

命を助けし恩人が冤罪の爲に一命も危ふき事を知る上の我身を棄ても舊恩に報る心の非ず
んば坏か人間と言れんや又何故に問ひるゝと怪む体を見るよりも儘又夫ある心底から一大
事を咄さんと左門之助が事柄を詞急度物語り且又途中の事共を洩なく二個に打明せば聞
度毎に仰天し我々斯て無事あるも宮本様のお蔭なり其恩報じの今日中より力を合せて獄舎を
破りお救ひ申出さんが一人の追手を防ぐ可し二人の生の有る限り替るゝ脊に負て石州津
和野又遁れんか如何せやと力士の三個最早一生懸命にて助る工夫と相談せしが一端牢を
破れば迎お上の人数に取圍まれ事能はざる其時は唯犬死を爲すのみなれば外に手術の無き
者かと心を碎いて居たりける

第十五回

俚諺に曰く情は人の爲ならずと又宜なる哉斯て力士の三個の破獄なしても救はんと種々よ
心を碎きしが中にも三保松の二人に向ひ油屋の旦那を初めとして助けられたる者なれば之
より三個打連立忠兵衛様又相談せば宜き御工夫の有るかも知れず玉手山より岩戸川お主等

如何思ふやと問ひれて二個も横手を拍少しも疾くと云ふが否力士の者の馳出し油屋方の勝
手より案内もせず奥へと入ぬ此日忠兵衛の番頭の喜兵衛を敵手に茶の間に於て圍碁の勝負
を娛み居しが斯と見るより碁の手を留め今日の儘に初日と聞しが今頃揃つて来られし如
何なる用の出来せしや遠慮に及ばぬ用向を咄して聞し下されと日頃愛顧の力士の事ゆゑ心
隔てお問ひければ三保松の進み出さ當りての一大事御相談を願ひん爲打揃つて參上せり且
那樣にもお忘れあるまじ昨年暗日根峠に於て貴君様とも九人の者が山賊の爲に殺さるへき
をお助け有りし宮本様と咄しも半に至らぬを忠兵衛之を押留め其お咄しひ爲給ふお今に聞
さへ恐怖と身震ひ爲して又云ふやう斯して春を向へしも宮本様の御蔭ゆへ毎朝私の御武運
を神に祈りて居る程なれば片時なり共忘れいせずと咄すを聞より力士の三人一口同音に詞
を揃へ左門之助が身の上を詳細忠兵衛の物語れば夢かと計りに仰天し轟く胸を漸く鎮め能
も相談下されたり宮本様に限りて一人殺し坏致されて賊を働く御方おらず全く冤罪に相違
なし御恩報じは此時なれば金にてお救ひ申せるから我身代を潰しても是非ともお助け申さ

ねば私に固り力士の衆も身の一分が立ぬ者なり幸ひ南の町御奉行彦尾様ども御入懇なれを
逐一言上致せし上再吟味を願ひ申さん少しも遅々する處に非ずと身支度迎も手疾くなし
三個の力士も同道し打連立て四人は者彦尾の邸宅へ到りしが中の口より案内を請へて用
人福田新七は何心なく立出来り斯と見るより詰所へ通し夫より忠兵衛并に力士が何か至急
の願ひにて參上せりと云上しに吉左衛門の之を聞如何ある願ひの趣きなるや兎も角此へ通
すべし對面せんと時しの詞に新七再度詰所へ來り待設けたる忠兵衛等に主人の詞を申告與
へ通すに願ての事彦尾は出て面會し何やら火急の願ひの由力士の者等も同道にては興行杯
の事なるか疾く申せよと尋ねを受忠兵衛聊か進み出今日力士を召連て願ひ出しは餘の儀に
御座なく豫てお聞入もせし私共が去年の事大和巡りの返り路暗日根峠の絶頂にて一命
をさへ賊徒の爲に已に失ふ處をば石州津和野の浪士なる宮本左門之助と云ふ方に九人の者
迄助けられ其大恩の片時も忘れず罷在たるが今度不圖承るは佛庄兵衛夫婦を殺し金銭衣類
を奪ひし賊とて今日溜りのお牢屋へ送られたるとの事され共是は全く冤罪の爲と思ひ込だ

る願ひよは何卒宮本様の助るやう御再吟味を願ひ度此儀を聞濟給ひる上の忠兵衛の身代御
取潰に赤る迎も毛頭恨み奉らずと陳る側より清五郎も途中に於て不思議を覺へ且又出所
姓名を聞糺したる事迄も具に言上致すれば吉左衛門の冷笑如何ある事と存知の外容易から
ざる願ひあり如何にも昨年其方等が救助られたる事柄の聞及びころ致したかれと忠兵衛能
く考へ見よ凡人心と云ふ者の日毎に心の變る者にて初め善人と呼れし人も後悪人となるも
有り初め悪人で有り迎も悔悟に及んで善人と忽ち變る者もあり今其方等を助たる左門之助
と云ふ人も汝ら九人の者共が賊手に陥し其時の義勇と以て救ひし者なり庄兵衛夫婦を殺
せし時の此悪心と變せしあらん左すれば如何程其方等にて大恩人で有る迎も今は人殺しの
盜賊からずや拙者の長らく病氣の爲に出勤もせず居たなれば曾て様子も知らされ共今日送
りになりしとわれは白狀なして服罪し最早吟味も相濟て搦印口書の後ならねば溜りの獄舎
へ下しいせぬなり夫を笑ぞや冤罪と見做し再吟味を願ひ出るの上を恐れぬ心得方餘の者
なれを直様に咎を申付べきかれ共其方達の事ゆるは聞捨よして取る間疾退けと満面又憤

りを合て云放され吠と平伏なしたるが恐るゝ忠兵衛の再度漸く頭を擡げ仰渡さるお詞へ
 押返しての恐れ多けれど今一通お聞下され善人なり共悪人と變り悪心よても悔悟の後又善
 心となる者ありと其お諭しの去る事ながら宮本氏に限りては變心なさる御方ならず其ある
 証據の其砌り當座れお禮と百兩を差出せ共手にも取れず其後路用の乏く在さば私し方へお
 出の筈なり居所も詳細申上儘は御存知なるべきに私し共へのお出も無く儘が計りの金子の
 爲よ老の夫婦を殺す杯との決して御座なき事なれ心之等の事を幾重も御賢察を成下され
 御吟味直しを願ひ升ると陳る詞も口曇りて浮ぶ涙を押し拭ひ申出ると聞より吉左衛門の大
 ひに怒り假令如何ほど其方共の罪人宮本を信する共人を殺せし覺へのあれば奉行原田の吟
 味を受罪に服せし者あらずや犯せし罪科のあらざれば拷問の爲に死する共服罪すへぎ謂れ
 かし左すれば何ぞ冤罪と爲さんよしや冤罪と看做とも一端奉行たるへき者が吟味おしたる
 事件を再度拙者の調ふる上の夫なる罪人は棄置て原田の非を心舉ねばならぬ又其上は宮本
 が犯せし罪科のある時は原田へ對して相濟す其言譯には某しの切腹せねば相成ず斯る事を

も辨へて再度詞を返すと云ふの太だ不埒の心底なり平常の入懇も甘んじて我を侮る願ひと
 見へたり疾く立去れば用捨をせずと息巻猛く罵懲され忠兵衛を初め力士の者は返す詞も無
 きのみか最早助る手段も無く頭と垂て蹲り黙然として在りければ吉左衛門へますゝ怒り
 退ぞかすやと荒らかに申渡され四人の者凋然其場を立んと爲す此時後の襖と開き走り出し
 の細君と娘菊枝の二個にて右左りより取絶るを吉左衛門は備と睨み婦女如きが此席へ罷り
 出へき處も非ず退き居よと戒むれど聊か臆せず側に寄り御腹立の去る事ながら妾の申し上
 るをば先一通りお聞下され最前よりして忠兵衛が願ひの赴き聞に付申し上ねばならざる事
 あり尊君のお忘れわれしか前一昨年のお事よまて江戸お邸にお勤め中正月中旬の事あるが
 妾の娘と諸共は福田新七を供に連龜戸村ある天神へ參詣致せし其返るさ中食のため立寄り
 其家に於て不圖も若士が入來り娘に酌を取せんと手込にすべき其折柄數多の者を懲した上
 お救ひ有りし其方の宮本左門之助と申聞られ諸國を廻る身なるが故に宿所と云ふは定めず
 と緩々お禮の詞も聞れずお別れ申せし事共を返りし後に妾よりお咄申上たる時居所さへ分

らば尋ねて往厚く謝禮を爲すべし者を此後對面致しもせば是非思返しを爲ねばならずと屢
 仰せられしにや娘よ和女も忘れはせまじと母の詞又引續き又其時の事共を洩なく父に物語
 れば妻は良夫の側より寄り今忠兵衛等が願ひ出しも其宮本氏に相違あし妻や娘のみならず新
 七迎も其時は供に召連ありたれば能くお顔さへ存知あるべし旦那様に此事を最早お忘れ
 遊ばせしか其頃仰せしお詞の今に違はず在するなら何卒御吟味下されよ妻や娘も願ひ升る
 と過し事共物語られ吉左衛門の打驚き如何にも先年江戸表に在勤なして在る砌り妻や娘の
 大難を救ひ呉たる武士は宮本左門之助と聞及びしが又忠兵衛共九人の者を残らず助けし御
 人とおれば世々珍敷名士なり左すれば今回の一條も冤罪の事かも圖り難し某し出勤致して
 居れば假令係りで非ず共又宜き工夫も有りつる者を知らず過ぎ事といへ妻や娘の大恩
 人此儘見棄て居らるべき此より出仕の届を出し罪の有無と取亂さん忠兵衛並よ力士の者願
 ひの趣き聞届りと吉左衛門の詞を聞四人等く飛立計り嬉し涙又咽びける此時田坂彌十郎の
 至急よ拜顔致し度事柄ありて參上せりと新七を以て申入れば吉左衛門の居室へと通し何や

ら急用の赴きなるが貴所も御承知ある如く長
 らく病氣の身と以て引籠りて居なれど容易
 ならざる出願に今日之より出勤なす實の拙者
 の所存ありしが就て貴殿に早速ながらお尋
 ね申す事こそ有り此程罪科の極りし庄兵衛夫
 婦を殺せし賊の様子に定めし御承知なるべし
 吉左衛門が身も取ても棄置難き一條ありて此
 儀をお尋ね申すなりと聞より彌十郎も進みよ
 り某し迎も餘の儀に非ず石州浪士の宮本なる
 者人殺しせし賊なりと原田氏に召捕れ吟味
 せらるゝ様子と云ふ日々手荒き拷問のみに
 て如何にも不審の事共多く小生再度諷諫も爲



彦彦吉左門

油屋忠兵衛

岩戸川

王手山

三保松

つれど曾て聞入給ひぬ耳か吟味も付て越度の有べ切服致す迄の事必ず口外無用ありと奉行
 たるべき方にも似合ぬ餘りの事と存すれ共下役の身分已むを得ず又宮本と申する浪士の天
 晴優れし人物にて拙者の眼で見ると時の中々賊など働くべき決して者共思ひぬより實に獄内
 へ忍び行云々斯々謀ひて一時の命を救はん爲假に服罪致させ置しが唯此上へ全くの賊を召
 捕得ざるも於ての惜き名士を失ふ故貴君に此等を打明し宜きお指揮にも與からんと參上致
 せし事ありと田坂が始終の物語りに吉左衛門の雀躍し其元なく宮本の命の疾くに失ふ可
 きに能も斯まで計らひれたり我等も於ても棄置難き其事柄と申すの何様く云々と江戸
 在勤の其砌り妻や娘の救はれたる事且又昨年忠兵衛等が助けられたる始末を透一此は物
 語れ彌十郎の聞毎に唯々感歎なす耳あり此時彦尾吉左衛門は何やら田坂に囁き示し忠兵
 衛等を引取せ夫より直様出勤し左門之助が事柄を詳細書面に相認め再吟味とば願ひ出しに
 加賀家の國老長甲斐に願書を讀て驚かれ直ち彦尾を招き寄られ尙ほ一伍一什を糺し
 且の見込に至る道具も承知せられしより願ひの趣き聞届再吟味を許されたり

第十六回

亦説彦尾吉左衛門は原田軍次兵衛も書を贈り庄兵衛夫婦を殺したる左門之助が身分も付外
 も調ぶる事の有るより最早御吟味濟され共再度拙者の糺問なせば此段お合置れ度と念の爲
 なる書状を見て原田の何やら合點の行す彦尾は是迄病ひの爲に出勤もせず在たる者が俄然
 に出仕を爲す耳か又宮本の事も付吟味及ぶ趣ひなるが如何なる事を糺すにや心憎しと
 思へ共留る權威も無き儘に知らず顔して打棄置り此方の彦尾吉左衛門彌十郎より密か申
 越たる事も有るにぞ不淨藏に自ら到り取上置し宮本の刀の勿論脇差をも改めばやと立入て
 夫々調べ見る迎も左門之助が両刀は曾て見へざる處より彌十郎をも呼寄せて俱に詮議を爲
 したれ共土藏の戸前も替りも無く誰迎外に取扱ふべき者も有ねば外より賊の入しと覺へず
 察する處右ある品の尋常ならぬ名作なるか但し拵への金銀なるに必ず私慾を起せし者が前
 に偷みし者ならんと是等の事を田坂も托し吉左衛門の工夫を旋し何れにも庄兵衛を殺せし
 賊の出されば左門之助が一命と助る事の能ひぬ耳か我一分も相立ず兎も角過し事ながら殺

害されし其際の様子を逐一糺しなば宜き手掛りを得るやも知れずと小清水村の名主の勿論
 庄兵衛方の最寄に住す甲乙をも呼出し皆打揃りて出たる折柄吉左衛門の席に着名主左兵衛
 に打向ひ昨年十一月の初の方居酒渡世の庄兵衛夫婦が盗賊のため殺害されしが其場の様子
 を存知知るべし如何ある者の所業あるにや心當りも有る事なら裏み匿さず申上よ何あり手
 係り共なるべき品の取落して有りもせざるや此等の事を糺さん爲呼出したる者なりと言
 渡されて面見合せ何れも詞を發する者なし此時左兵衛の頭を擡げお奉行様も伺ひ升る庄兵
 衛夫婦を殺した賊の直ちにお捕へと成る耳か此ほど御吟味も相濟て近き内よのお所置にな
 るやに承知致し升れど尙お調べ洩の事ありて御尋ねにも相成しかと恐るく偵ひければ吉
 左衛門の進み出如何も賊を働さし石州浪士宮本なる者原田氏の調べを受罪にの服したる
 なれど未だ明白ならざる故又々其方共と呼出せりと彦尾の申波しを受て名主左兵衛の稍
 須臾首傾けて居たりしがお奉行様のお尋に思ひ出せし事のあり其節勝手の入口も取落しわ
 る財布の御座れば必ず賊の所持せし物と私し方又取置たるが其夜の内に盗賊にお召捕と成

たる儘も竟其品を差上ねど若し御用にもなるならば直様取寄申さんと言上せし彦尾の悦
 び其品疾く持参せよ必ず手掛り共なるべき者と命を受て左兵衛の返り頼ての事に持参せし
 財布を夫へ差出せば吉左衛門は手も取上如何なる物や入しかと中なる品を取れば散子が
 二つ又一通の文より外も何も無く宛名の戀しき勘様へごぞんじよりと有るのみなれど之屈
 竟の品ありと此日の残らず引取せ其翌日とあるが否小清水村を始め尙は近村の戸籍帳を取
 寄て自ら逐一改むるも勘と云ふ字を頭も付る名前も數多ありたれ共多くの老人小兒にして
 此と看認る者も無く尙は繰返して詠る内庄兵衛夫婦の籍面を不圖見當て改むれば最早除籍
 の者なれ共前に養子と定めたる勘八と呼ぶ名前のありし此奴は當時如何なる身分か事よ
 も寄らば此者の所業あるやも圖られずと又候名主を初めとして同村の者を呼出し庄兵衛の
 養子勘八と云るの如何なる譯にて除籍と成しか且又當時の何れに居るや其職業は申すに及
 びず平常の行ひ又至る迄存知て居らむ誰もても委敷言上致すべし屹度褒美と取せんと申渡
 され一同の村の族の進み出異口同音に陳るやう唯今お尋ねの勘八事一端庄兵衛の養子と

せしが放蕩無頼の者にして色と酒とに身を持崩し其上あらず御法度の博奕の心を心掛一向
意見も聞ざる故庄兵衛夫婦も困じ果竟又勘當致してより最早六七年も過ますが昨年當りの
折々に見掛し事も御座り手れど當時の何國に居りたるや其儀は存知申さずと始終の事を言
上せしよ吉左衛門の大ひに悦び一同の者へ褒美を取せ退散せしめて直様彌十郎を呼招き
手掛りを得し事共を此又逐一物語れば田坂に於ても限り無く悦喜の眉を開きけり偕又原田
軍次兵衛の日ならず宮本の所刑を爲んと源吾兵衛へも相通じ其心組みて在けるよ吉左衛門
の何やらか調ぶる事の有るやよて書状と贈りし事さへあれば處刑を急ぐ譯もならず竊に
様子を探らしむれば左門之助を吟味もせず小清水村の者共を嚴重調ぶる事を聞忽ち大ひに
憤り一端我等が吟味を遂罪も服した宮本なるに又庄兵衛を殺したる賊を探索致するから
左門之助を冤罪と看倣や外に吟味の事あらば打棄置て宜けれ共我の斯と明しもせず心憎
き致し方あり其儀ならば捨置難しと吉左衛門が出席の法庭に原田の推參なし面に怒色を現
しなから一禮畢つて陳るやう拙者か調べし宮本と貴殿は冤罪と爲る、か左も無き時は何故

に小清水村を調べられしや其意を得ざる貴殿の心底此儀をお尋申さん爲め推參せりと聞よ
りも吉左衛門は眼に角立這の心得ぬ貴所の一言罪に服した賊にもせよ拙者に於て調ぶる事
を彼是言る、謂れなし假令如何なる事の有り共貴殿の越度に成らざる様取計はん所存なり
しよ答られたる上からの争か此儘黙て居らんや抑庄兵衛と殺したる賊は宮本と思するや
我等に於ての左門之助が所業なりとの存知申さず夫ゆゑ實の兇賊を捕へん爲の探索なるを
能も過言を申されたりと聞より原田の愈怒り現在罪に服したる賊を棄置外又賊徒の出
る謂れ無し方一拙者が調べたる賊にあらざる其時吾一分の立ざれば切腹致して謝し申さ
ん貴殿も於ての宮本の外に盜賊の出ざる時の何を以て言譯せらるや如何にも庄兵衛を殺し
たる寔の賊を捕へぬ時の貴所又對して濟ざる耳か上へも濟ぬ事あれば割腹致した其上よ家
名を没収せらる、共會て後悔仕らずと之より互ひ又双方より書面を以て届出れば長甲斐
殿にも驚かれ太守へ斯と言上し兩町奉行の出願を聞届られ其身も吟味の席へ着れたり此
時彦尾吉左衛門は左門之助を呼出し先一通り相調べ軍次兵衛も打向ひ貴殿の最初宮本を召

捕れたる其時より拷問のみに掛られたる由且又庄兵衛方より止宿と爲し其事柄をも調べ給はず其場に賊徒の取落せし財布一つの有りたるを余も御存知の御座るまじ是を寔の盜賊が心周章て遣せし品なり御覽あれよと用箱の中より財布を取らせば軍次兵衛の冷笑ある品がわらば逆外に賊徒の有るといふ必ず証據も相成まじ是とて人と殺害し金銀衣類を奪ひたる左門之助の事あれば已れが身の上を遁れん爲す斯の謀りし者かも知れず夫を何ぞや其元への証據と爲して宮本を盜賊ならずとせらるゝの片腹痛しと嘲る吉左衛門の大いに怒り然らむ不日其賊を捕へて貴殿の疑ひを必ず晴し申すべし逆此日一同退散せり之より後の片時も疾く寔の賊を召捕んと探索方を差出し百方勘入の行方と索れ共更手掛りを得ざるより吉左衛門の工夫を旋し或日數多の罪人を殘らず法庭へ呼出し其方共の内より當時勘入の何國も居るや行方を存知て居る者あらば詳細言上致すべし褒美として罪に雖にても罪の輕重を問はず直ち許し放つべしと言渡されて四人の互ひに面を見合せ居しが熊鷹傳次と云ふ賊が多くの中より進み出唯今尋の勘入が居所を申上りゆるお奉行様のお情で命を助て

下されと尙又前より這出るを吉左衛門の聞給ひ其方居所を存知て居るか疾々申上るべし命の助取せんと臥て傳次の打悦び其勘入と申する者の其實私が親分にて當時の大聖寺の片傍り柳が崎に居り升と申立しに吉左衛門の直様田坂彌十郎へ捕縛の手當を命せられしに又悦びの大方ならず自ら數人の手先を隨へ其地より出張ありたるが忽ち捕へて返られたれを直ち法庭へ呼出し嚴重吟味を遂られし初めの内の白狀せざれど最早遁れぬ處を悟り如何にも昨年霜月の初め庄兵衛方より罷り越金を借んと無心をすれど一向聞入ぬ處より是非なく手込に持去んと立掛りし時盜賊と夫婦の者に騒ぎ立られ認められなむ一大事と竟り夫婦を殺害なし逸失たるに相違御座なく早此上如何様ある嚴刑にても處せられ度と逐一白狀致せしよぞ口書押印も相濟せ其翌日と相成けれを長甲斐の申す及ばず軍次兵衛も出席せしよ吉左衛門の勘入を捕縛せしたる手續より罪に服せし口書を示し貴殿の斯でも宮本を盜賊ありと爲給ふか返答如何かと問ひ詰られ今更一言半句も無く默然として在りたる砌り左門之助が差料ある兩刀を夫へ持出し及是逆も御存知あるべし先に不淨藏を改むるに此二腰の見

へざるより篤と探索を遂たる處城下の町にて見當し故は出所の詮議を致せし處全く貴殿の注文にて拵へ直えを致する由其ものからの口書は斯此通り取置たり是のみならず其元には鈴木源吾兵衛の頼みを受左門之助を亡へんと手荒き拷問をせられしならずや鈴木に一郎と呼び豊後杵築に在る砌り宮本衛守を闇殺なし其後石州津和野に於て宮本勘解由を山中鳥銃を以て討果し逐電致して踪跡を隠し當家に仕へて在る事を漸く索ねて左門之助の叔父と親との仇敵討んと遙々下りし事を源吾兵衛の疾くも聞知己れが舊惡を掩へん爲の密意と貴殿の引受て庄兵衛夫婦を殺したる賊に陥して亡はんと深く謀り給ひしならん已に鈴木元老のお指揮を受けて某しが疾くも縛め置たる耳か嚴重糾問を遂たる處遁れ難きを渠も悟りて一伍一什を白狀せり斯迄露顯及及びし上の向を以て言譯あるや返答あれと云ふ打柄上座に於て傍聴ありし長甲斐殿の左右へ下知なし原田の小刀を取上よと大聲を發し給ふを相圖に顯れ出たる若士が軍次兵衛を取圍めば早是迄と立上り帶たる一刀拔より疾く彦尾吉左衛門覺悟をせよと大喝叫んで斬て掛れど數人の者も遮れ其場に於て擒と成しが奉行たる

べき身と以て重々不埒の所業あり迎即刻切腹を申付られ家名の没収せられたり又兇賊の勘八の一端養父母となりし庄兵衛夫婦を殺害し金錢衣類を奪ひし科にて引廻の上磔の刑に處せられ又熊鷹の傳次に於ては一時大罪を免されて處拂ひと成たるが直様悪事を働かしよ日數十日を出ずして再度捕縛とある耳か是又後日嚴刑に行ける諸宮本に此より先に吉左衛門の計ひよて數人の名醫が打寄りて内科外科共醫術を施し治療を加へし事なれば三月上旬に至りし頃の再度壯健の身と相成氣力も本腹致せしに日柄を擇て城外の廣場も高く矢來



と設け警護の足輕五十人六尺棒と取て非常を戒め復讐の用意を爲しめたり左門之助は早朝より身支度嚴重に打扮て時刻の遅と待受たり鈴木源吾兵衛も臆する体無く大刀腰に横たへて徐々現れ出たるが此日檢司として彦尾吉左衛門並に田坂彌十郎此他同心に至る迄列を正して居並びたり且又油屋忠兵衛を始め力士三個へも特別を以て復讐の傍觀を許されたり此等の事を聞傳へ近郷近在の人々の前日より群集り矢來の外山を爲し錐を立べき地も非ず片唾を飲で待受たり漸く時刻の來りしに相圖の太鼓を打鳴せば左右よりして現れ出しが左門之助の鈴木は向ひ父と叔父との仇敵最早遁れぬ汝等の一命疾く尋常は勝負をせよと大音聲に呼びければ源吾兵衛の冷笑敵呼はり片腹痛し先や來れと抜放ち身構へ爲せば宮本も争か猶豫致すべき名刀すらりと抜より早く斬て掛れば鈴木に於ても躰を變じて受流し之より互ひの秘術を盡し一上一下と火花を散し七離七合戦ひしが其當代に二と下らぬ左門之助が精妙なる武術に笑を敵すべき竟に其場へ斬倒され悶る處を宮本の透さず上に乗掛り留めの刀を刺貫けり斯と見るより吉左衛門の扇子を開きて差招き又見物の人々の唸と計りに聞

わけ是又萬歳を祝せしなるべし

第十七回

虎穴に入ずしての虎を獲ず危急に耐ずんば憂を除き難しと又宜る哉斯て宮本左門之助の一旦死地に陥りたれ共竟の晴天白日の身と相成數年の困苦も今は昔の夢と變じ彦尾の勿論田坂等の深き情に感歎し再生の恩を茲に謝し又吉左衛門に今回吟味名士を救ひし賞として百石の加増あり彌十郎も夙に宮本の冤罪を悟り非常の勤功あるを以て奉行原田の後任を命せられ忠兵衛並に力士の者への夫々賞與のお詞あり又左門之助を召出され新規御指南番に召抱へんと屢仰せ出されけるも未だ志願の事あり逆固く御辭退及及びし故然らば緩々逗留せよと賄ひ方を附させられ御長屋をも貸下されしに宮本の深く厚恩を謝し尙も氣力を養ひ居に或日彦尾の邸宅より招きの書狀が到來せし何事なるかと衣服を改め罷出しに彌十郎も席に在り一間隔てし次の室に油屋忠兵衛を初めとして力士三人の並び居しが吉左衛門の左門之助に四人の者を紹介暗日根峠の事共を具に語りて俱に謝し頓ての事

其席へ山海の珍味美を盡し酒宴を茲に設けしが其配に及びし頃妻と娘を呼出し宮本氏
 へ某より今日改めて妻子が受たる再生の御恩と報るなり余もお忘れの有りまじと思ひ寄ら
 ざる詞を聞不審ながらも宮本の一禮爲して熱々と二個の面を詠むれば先年江都に在る砌り
 龜戸村の天満宮へ參詣致せし返り路危難を救ひし婦人なるにぞ此の計り打驚さす
 不審の体なるに吉左衛門は進み寄り一伍一什を打明せば妻の濱野娘菊枝も進み出替る
 に宮本へ深く禮を陳るを以て漸く不審の晴たれど先に自ら助たる又其人々の手と以て自分
 の危難を救ひし如何にも不測の事なりと感歎の外あらざりける之より尙ほも打寄て左
 門之助を饗應けるが酒宴の席も開けし折柄吉左衛門の又宮本に打向ひ貴君も愛度本懐を達
 せられたる上なればお渡し申す御人あり受取れよと言ながら妻も何やら申付け程無く夫
 へ運出しの彦尾の娘に劣らざる最輝媚たる美女なるに合點行すと宮本の夫ある婦人の面を
 見れば其身が豊後に在る砌り妻と定めし八重梅なれば遣は開も如何に夢あるか餘りの事と
 不審暫時詞も無かりし實に尤と知れけり吉左衛門宮本の間近く進みて微笑つ其御不審の

去る事ながらまづ某しが是迄の始終を貴君へお咄し申さん拙者が昨年秋の末公用に付て新
 潟へ出役致せし返り路悪漢共に取圍れ難儀せられて在れば其場を救ひて連歸りお世話を致
 し置たる處此ほど當藩中の人々が妻に呉よと絶へずの言込夫ゆゑ良縁あらば兎も角と八重
 梅どのに尋し處津和野藩士へ嫁したる身ゆゑ未だ婚禮の爲す共他家へ嫁く身に非すと操正
 しき御心慮拙者も感服致せしが貴君も津和野の御藩士ゆゑ若しや貴名を御存知あるかと不
 圖お尋申せしに夫ころ良人と定めし人とお咄し有て拙者も驚き斯も奇遇の不測なれ共まづ
 其元が今回の事件並に敵を撃れし事迄大畧お通じ申せし八重梅どのにも夢あるかと歡ば
 れしもお察し申す御遠慮あるお八重梅どのの疾く御挨拶をせられよと自ら立て袖を取り左門
 の之助の傍ら座せしめられて今更に嬉しさ哀しさ耻しさ先立者の涙にて傍の見る目も打忘
 れ唯泣伏て居たりしが漸く有て頭と擡げ貴君もお別れ申せし後父將監の闇の夜に人手に掛
 りて果敢なき御最期其傍ら遺して有りし紙入の中より塚原左源太と記せし名刺の有るを
 以て是ぞ敵と看認し故夫より様子を探りし處其前父が他出の時出先に於て兵法の議論を以

て塚原を大ひに戒め給ひし事の有りしと後よて聞出し夫を遺恨に父上を殺せし者と解りし故母上様と諸共に貴君のお側へ参らんと手蔓を以て御様子をお索ね申上たれば勘解由様にも人手は掛り御最期ありし耳ならず貴君も已に仇討の願ひを上てお國と立退今の何國も在すやら知れざる由の報知を得て又驚きお爲たされど斯て有るべき事あらねば心細くも當も無く諸國を巡り仇人を索る旅中に母様の美濃地に於て御持病發り竟に其地で歿去其時妾の哀しさの俱死あんと覺悟を爲ど斯ての後に父母の菩提を吊ふ人さへ無きに夫を思へば死もならず處の者も諫められ涙がらふ立出て其處此處と無く呻吟うち惡漢共の手に捕れ新瀉とやら云ふ處へ連れて來られて遊女に賣渡さるゝ其折柄縋の透を偵ひて遁れ出しが路さへ知れず又も後より追掛られ再度手込まなりし折彦尾様も助られ厚さお世話と受ながら竟今日まで居りましたと始終を明して宮本の片邊に伏て八重梅の涙に咽ぶを道理あり左門之助の夢ある如く八年目にて不圖も不測の對面を致せし故歡ぶ事又引替て師あり舅の將監が横死の事を聞に付敵の塚原左源太と詳細聞て斷と爲し其奴の先年某しが筑後久留米に在る

砌り塚原方に逗留中刀の中身と偷換られ知らず出立致せし後旅宿に於て心附取て返せむ左源太の同國足代山へ罷越門弟共を打集ひ野試合を催し有る由を留守居の者より承り其場に踏込多くの弟子等と斬拂ひ刀は直ち取返せしが塚原のみ手も負さず取逃せしと今以て遺憾ありと思ひ居たるに又も其奴の手も掛り田丸殿にも御最期ありて最早此世に在さぬかと思ひす兩眼涙を浮べ悲歎咽ぶを傍らよて始終の様子を聞居たる彌十郎は進み出某し最前より各位方の物語られるを聞き付お咄申す事の有り何を隠さん我等が實父は元和九年の秋の頃武術修行の爲として當國金澤に逗留中我家へ屢出入をせられ竟も入夫とあられしが二歳餘り過る内擧られし其にて悦び給ふ程も無く母の産後に日立の悪く三十日を過ぬ内歿去れたる趣きあるが當時同僚の甲乙が父の武道は優しを妬み讒言爲すも屢あるも後日の愛を遁れん爲赤銅作りの脇差へ書一通を紀念に残し遂も家出を爲れし由我等の祖母も養ひれ稍人心を覺へし時金五十兩に書狀を添見馴ぬ旅人の届て行しに不測ながらも開封し書面の体を見る處先も家出をせられたる我父上の書狀もる當時何れに在すやら様

子を聞んと馳出しが届に来る旅人の最早陰さへ見へざれば後で悔めと其甲斐なく尙は文体
を讀見るに當時の田丸將監と名乗未だ住居の定めぬ共九州地方の先祖より居住致せし地を
るを以て身を落付る心得云々且又金子の某しへ學資の爲に差贈ると深き情の御書面を
我等の愈慕ひしく成人の後の是非共に父子の名乗も爲ん者と娛み居たる甲斐も無く勤る
身分と相成ての他出も自由ならざる儘打忘しにあらぬ其竟今日迄過たる處不圖父の横死と
聞日頃の志願も此も絶へ落膽致せし拙者の胸中お察しあれと眼に涙浮べながらも八重梅の
間近く進みて和女こそ腹の替れど我等が妹永の星相父上のお側に居りし者されば我身の事
も折々は咄にても有りしなら物語られよと名乗られて又も吃驚仰天し須臾の餘りの不測
さに詞も出ず八重梅の顔のみ見詰て居たりしが忽ち下座へ飛下り如何にも折々父上に未
だ壯年の事あるが加州に於て或家の入夫とありし程も無く一人の男子を學志が妻なる者の
産後に歿し面白からず在る砌り同僚中より不良者あり根も無き事を言立て譏言爲すを知よ
り後日の難を遣れんため家出を致して後一度竊に書狀を贈りし後の絶へて音信もせざりし

が定めて成長せしならん其時紀念の印にと殘し置たる脇差の其拵への赤銅作り目貫の金の
狂ひ舞中身の備前長光なるが最早當時の平常の差料にしても居るならんとお咄ありしに屢
々おれと妾も幼き頃おれば深くも伺ひ置もせず唯今お咄申たる事のみ覺へ居ました其様
なら貴君が妾の爲に兄上様で在せしかお嫵媚やと平伏て嬉し涙を催しける此時彌十郎の次
の室より父の紀念と手放さぬ其小刀を持來り尙は疑ひの無き爲に宮本氏も諸共に御改ため
下されと差出されて八重梅と左門之助の手に取上中身の更あり拵へを改め見れば這の如何
に今八重梅の申せし如く少しも違ひぬ脇差あるは互ひに目前の奇遇を怪み悦喜の眉を開く
折何思ひけん彌十郎の横手を確と拍鳴し敵塚原左源太は日數十日を出ずして急度討取申す
べし歡ばれよと聞よりも宮本並に八重梅が開い又如何ある事にして敵の所在を御存知なる
か疾々仰せ聞されよと右左りより詰寄るに彌十郎の莞爾と打笑實の先般大聖寺へ近き處ま
で出張し兇賊勘八を召捕たる其歸り路に拙者が師匠玉野左近と申する者に途中で面會致せ
し時塚原左源太猛虎とて随分武術と心得ある當時浪士の身の上あるが仕官の望あるやにて

尋ね越たる事のあり何へなりと世話してと師の依頼ゆゑ已むを得ず心急し中なれど其居所をさへ聞置しが察する處亡父の靈魂自と導き給ひしならんと物語られて二個の悦び彌十郎共討取べき手術を茲に談合せり偕又彦尾吉左衛門の思ひも寄らず我家に於て夫婦兄妹の奇遇に驚き默然として居たりしが今又塚原左源太の在所も直ちに知ると云は此神佛の力を以て引合されしにあらざるは斯る不測の有るまじと又改めて酒宴を設け三個を茲に祝しけり其翌日に相成と彌十郎の宮本の宿所に来りて對面し我等も實父の仇なれ共父の家出をせられし人故今更敵と名乗もやられず且又御承知ある如く君へ仕る身の上なれば刃を取て向ふも難し何卒貴殿の武勇と以て妹八重梅に力を添首尾能敵を討しめられよと萬事残る方も無く世話を致して塚原の在所を詳細示すにぞ左門之助と八重梅の天へも登る心地して其悦びの大方ならず直機身支度を充分し能登國小田矢をさして乗込ける偕又田坂彌十郎の吉左衛門の計ひもて上へは病氣保養のため湯治の向に披露を致し後れ走に駈付來しが未だ宮本の仇討せず敵の様子を伺ひ居たれば左源太を欺く手術と示し塚原方に趣きて其身の師た

る玉野左近の書狀を出し仕官のお世話を致さん爲め推参せりと言込けれを直ちよ面會を爲す耳か大ひに喜悅の体なれば仕濟したりと詞を工み欺き出して同道し人家を放れし松並木に差掛りたる其折柄待設けたる宮本の八重梅諸共走り出田丸將監の仇敵余も某しを忘れもせまじ筑後久留米に在る砌り足代山まで汝のみ取逃したる宮本あり此なる者の田丸の娘八重梅もて俱不戴天の親の仇ありいざ尋常に勝負をせよと右左りから詰寄けれ今ハ通ぬ左源太が片邊に在りし彌十郎も俱以前の事を説連出さんが其爲よ玉野の書簡と偽りて此



まで欺き出せし者あり最早遁れぬ汝の命立合すやと罵られ謝を爲と其詮さく早是迄と
 一刀を抜より早く斬掛来るに左門之助の八重梅に力を添て立向はせ竟に塚原を討しめたり
 夫より彦尾吉左衛門の首尾能復讐の濟しを悦び萬事自ら引受て檢視其他の事も濟せ皆萬
 歳と祝しける又藩中の人々の一度あらず二度迄も宮本の仇討を爲しよ驚き或の武勇の優し
 ん感じ是非共當家仕へられよと勸る者の多けれ共一端御辭退を致せしのか未だ本國に
 は母親もあり舊主の思も棄難き事を申陳て固く辭し尙は二月餘り逗留せしが斯て有るべき
 事ならねば互ひに別れを惜みつゝ又の對面を約し此年初の初め方八重梅は田坂彌十郎より
 心利たる者を差添て石州へ送らしめ左門之助の歸路を立寄る處あるを以て後より金澤を發
 足しぬれば彦尾田坂も國界まで見送り油屋忠兵衛力士の者の尙餘數十里を送り出しが其別
 るに臨み餞別あり進許多の品々を贈り又心利たる若者二人を御本國まで差添んと申出る
 も宮本の堅く之を謝絶し月日を重ねて播州姫路に到着し國老黒崎左膳に面會して先年の厚
 意を深く謝し其より四國に渡りて土州足摺山に到り小松翁に對面し北國に於て大難を遁れ

し事共より本懐を遂又翁の先見に違はず田丸將監の仇敵再度塚原左源太を討し事より田坂
 彌十郎と八重梅が兄妹ありしを物語り其他姫路の天守に於て妖狐を退治し又奥羽廻歴の一
 伍一什を洩あく茲に物語れり翁に於ても屬奇異の想ひを爲して只管左門之助が高運ある
 を祝し竟に四五日逗留致して暇を請ひ石州津和野へ發足致しぬ又獵人大作の初め足輕あり
 しも非常の勤功あると以て立身し山邊大之進と雖も宮本に別れし後上州高崎に於て仇と討
 しが此等の本編に關るべき履歴ならねば畧す且又豫州松山の在高波村の農夫宇右衛門の悴
 字作なる者も左門之助より恵れたる金拾兩と資本とあし言聞られし教訓を守り孝義怠り無
 きを以て十九才の時再度同村の名主と相成此より家富榮へしといふ又宮本は津和野に返り
 光蓮寺へ趣き八年目にて母子恙が無き對面に及び八重梅を改めて妻と爲し國侯に仕て精勤
 を尽し愛度星霜を送る内二人の男子を擧しより次男を以て田丸の家名を嗣さしめ一家殊に
 親睦して子々孫々まで榮へしと云ふ

金梅鉢 宮本左門之助武勇傳下終
 譽名木

明治十七年五月廿六日御届
全 年六月出版

定價金五十錢

東京府士族

編輯人

岡田良策

淺草區西三筋町三十四番地

東京府平民

出版人 金松堂 辻岡文助

日本橋區橫山町三丁目
貳番地

- 曲亭馬琴著 一椿說弓張月 美本洋綴前後二冊 定價 二圓四拾錢
- 曲亭馬琴著 一青砥藤綱摸稜案 同全壹冊 定價 壹圓
- 一繪本西遊記 同洋綴全壹冊 定價 壹圓五拾錢
- 一繪本楠公記 美本綴全五冊 定價 壹圓四拾錢
- 一八百屋於七胡蝶の夢 全壹冊 定價 拾貳錢
- 一雪鏡談 全三冊 定價 五拾錢
- 一笹野權三一代實記 全壹冊 定價 貳拾五錢
- 一怪猫岩瀨於菊仇討新話 全壹冊 定價 廿錢
- 一奇談 全貳冊 定價 五拾錢
- 一金梅鉢 全貳冊 定價 五拾錢
- 一琴名木 宮本左門之助武勇傳 全貳冊 定價 貳拾錢
- 一辨天於浪長船奇談 全壹冊 定價 貳拾錢

- 一濡衣女鳴神 全五冊 大尾十編合本 價 六拾錢
- 一柳の幕魁草紙 全五冊 同大尾 合本 五拾錢
- 一花の淺草十社文庫 全五冊 同全五冊 合本 五拾錢
- 一仇櫻龜山奇語 全四冊 同合本 四拾錢
- 一音記久小倉草紙 全三冊 同合本 三拾錢
- 一宮本義勇傳 全三冊 同合本 三拾錢
- 一お染久松浮名の質見世 全三冊 同合本 三拾錢
- 一吉野山千本櫻 全三冊 同合本 三拾錢
- 一名高天下茶屋 全三冊 同合本 三拾錢
- 一梅の春端唄文庫 全三冊 同合本 三拾錢
- 一水鏡山鳥奇談 全四冊 同合本 四拾錢

